

習熟度別クラスにおける英文 「フリーライティング」指導の試み

村 上 佳寿子

1. はじめに

本学では入学前に実施される英語プレースメントテストの結果により、習熟度別クラスが編成されている。英文学科においてはその結果に基づいて4レベル8クラス編成を組んでいる。本稿では、筆者が担当するDグループの7組8組合同クラスの、「Writing I、II」の授業の実践の経緯を、特に「フリーライティング」を中心にまとめて若干の考察を加えたい。

「Writing I」の初回の授業の中で、出席カードを用いて今後の授業展開の参考にするために簡単なアンケートを行った。アンケートの実施方法については後の章で言及する。このアンケート結果を基に「Writing I、II」の授業では、以下に述べる2つの課題が出てきた。まず第1に学生の抱える不安を払拭することである。不安は2つある。1つは英語そのものに対する不安、つまり英文を書くことが苦手、英文法がよくわからないなどの英語の学習に関する不安である。もう1つは精神的な不安である。それは学習習慣の定着の不十分さと、学習経験の少なさからきていると考えられるもので、過去においてあまり勉強してこなかったという後悔の念やある種の負い目からくる自信のなさと言い換えることができる。第2は、辞書使用法の指導と辞書の活用である。英語を勉強

するために入学した英文学科の学生であるにもかかわらず、これまでに辞書を積極的に使った経験が乏しいことがわかった。辞書の使用を促進して、活用法を学び、辞書を使用して調べる楽しさを知ることから、考えて英文を書く楽しさにつなげることが重要である。

特に「フリーライティング」を通して2つの不安を軽減し、辞書活用により英文ライティング能力向上を目指すことが出来ると考えた。本稿において「フリーライティング」とは自分の考えを自由に英語で書くことと定義する。過去の先行研究を参考に、学生との関わりから得た筆者の気づきを基に実践した「Writing I、II」の授業展開を報告する。

2. アンケート実施方法と結果

このアンケートは初回の授業において、授業の内容と進め方や評価方法などのシラバスの説明、自己紹介の準備と練習、自己紹介の英文を書く課題の後に行った。目的は、学生がこの授業に何を求めているのかを知るためと、授業やクラスに慣れて学ぶ喜びを感じられるように、現在の心情を知るためである。そして、このアンケートの結果を今後の授業展開に活用し、教育効果を高めるためでもある。質問は次の2つである。

- ① Writing I の授業にどのような心構えで臨むかを書いてください。
- ② 今の気持ちを何でも自由に書いてください。

出席カードには自由にかつ簡潔にコメントを書くように指示をした上で行った。①についてのアンケート結果は、「一生懸命に頑張りたい。」「すらすら英語を書けるようになりたい。」など、意欲が感じられる回答が多くを占めた。しかし、同時に多くの学生が付け加えていたのが、「英語を書くのは苦手です。」「英文法がよくわからないので心配です。」「授

業のレベルについて行けるかどうか気になります。」などの英語そのものに対する不安であった。また、シラバスの説明の際に伝えた「授業には必ず辞書を持参すること」に対する反応として、「高校で辞書は必要なかった。」「高校の授業で辞書を使ったことはほとんどない。」という回答もあった。この点について後でクラス全体に聞いてみると、「今まで辞書が必要だと感じたことはなかった。」「中学、高校の授業で辞書を使ったことはあまりなかった。」という回答が多かった。中には「辞書は今まで持っていなかった。」という学生までいた。この学生は短大入学直前に電子辞書を購入したということであった。

②についてのアンケート結果は、「早く学校に慣れて勉強も部活も全部がんばりたい。」「英検2級をとって英語を話せるようになりたい。」などの積極的な姿勢が感じられる回答が多かった。しかし一方では「短大の授業についていけるかどうか心配だ。」「今まで真剣に英語を勉強してこなかったのが大丈夫だろうか。」「周りのみんなが出来そうに見えて不安を感じる。」などの消極的な内容もあった。この質問に対する回答にも漠然とした不安が多く書かれてあった。

3. Writing における辞書指導のあり方

英作文の際に辞書を使用するように指導することと、時間を制限して書かせるのが有効かどうかについて書かれた文献を振り返る。制限時間内に書かれる英作文における辞書使用の可・不可が与える影響について、井之川 (2009) は「辞書を使用して書かれた英作文 2A と辞書を使用せずに書かれた英作文 2B の評価に有意差が認められなかった。」¹⁾と書いている。

さらに井之川 (2009) は流暢さ・正確さ・複雑さ、使用語彙などにおいてどのように異なるかを指摘する。

辞書を使用して書かれた英作文 2B は、辞書を使用せずに書かれた英作文 2A に比べ、

- ・ 流暢さ・正確さ・複雑さの指標に有意差がなかった
- ・ 使用頻度の低い語が多く観察され、また、多様な語彙を用いて書かれていた
- ・ 話題の記述量に差があった
- ・ ミススペルが半数の出現率であった
- ・ 辞書検索が原因の語彙選択エラーがみられた

という結果となった。このように、総合的評価、流暢さ・正確さ・複雑さの指標には有意に現れなかった相違だが、使用語彙、ミススペル、話題の記述量に違いが現れた。このことから、辞書使用は英作文の総合的評価、流暢さ・正確さ・複雑さの量的観点には反映しなかったが、異なる質を持つ英作文を算出させることに貢献したと考えられる。²⁾

ここに述べられているように、制限時間内に書かれる英作文において、辞書使用によりスペリングミスは半減するという効果はあるものの記述量に差があったということは、辞書で調べることにより英単語は正確に書くが、調べるのに時間を費やして、英文を書く量が減るということが起こっていると言える。また、辞書検索が原因の語彙エラーが見られたということは、辞書に頼りすぎて、調べただけでよく知らない英単語をそのまま使用して間違ってしまうと推測することができる。以上のことから、辞書使用の経験も豊富ではない 7 組 8 組では、フリーライティングの際に辞書を使用せずに英文を書かせることが望ましいと判断した。そこで、フリーライティングでは辞書を使用せず、3 分間という短い時間で書かせることから始める。ただし、書いた英文を各自が添削する際の辞書使用を許可し、クラス全体で実際に辞書を使いながら辞書の活用法も教えることにする。そのようにして、少しでも辞書使用の頻度を増やすことが重要であると考えた。

テキストを使用する際にも、必要に応じてクラス全体で辞書を引く機

会を設け、時に応じて音声機能を活用することで教育効果を高めることができるかと推察する。辞書使用に関しては、クラス全体で、時にはグループで話し合いながら、辞書を媒体とした学びが継続するように配慮した。辞書はテキストと同等に英語の勉強には必要不可欠な存在であることを再度認識させたい。さらに辞書を使用しないことを選択した國吉(2003)の研究をしてみる。

学生は、辞書の使用は許可されない。テーマは、前の授業時間に提示され、必要な単語があったら事前に単語帳をつくってくるように言っている。基本的に、すでに自分で使える英単語群の範囲で作文をすることになる。辞書を使うと、作文に非常に時間がかかることと、必要以上に難しい単語を使いたがる傾向があるので禁止した。³⁾

國吉も井之川同様に、辞書を使うと時間がかかることと、難しい単語を使いたがる傾向を指摘する。しかし事前にテーマを伝え、学生が必要な単語を調べて単語帳を作るという自習の機会を与えることで、各自が辞書使用の時間を延長していることが推測できる。授業時間のみならず自習時間に辞書を使用するにはどうすべきかを考えた時、1週間前にフリーライティングのテーマを知らせることにより辞書使用の頻度を上げることができると考えた。1週間の準備期間で、辞書を引く機会が増えると予測してテーマを事前に知らせ、その効果を期待した。

4. 「Writing I、II」の授業～テキストを中心に～

「Writing I、II」は前期と後期に開講される英文学科1年生の必修科目である。筆者が担当するのは7組8組合同クラスの学生26名である。科目の概要は英作文の基礎的能力の養成と英語独特の表現の習得をめざすものであり、具体的な到達目標は2つある。第1は日本語を読んでその内容を正しく伝えられる正確な英文を書くこと、第2は自分の考えを

簡潔な英文で書くことである。

「Writing I、II」の授業はテキストの *Writing Points! Basic Grammar for Better Writing* を主体に行い、1か月に1回程度の頻度でフリーライティングを行う。フリーライティングについては次章で述べる。テキストを使った毎回の授業内容と流れは次の通りである。

① 授業のウォームアップとして、簡単なリスニングから始める。まずテキストの各ユニットの1ページ目にあるモデルエッセイ（単語数は200～250）のプリントを配布する。モデルエッセイにはいくつかの空欄があり、英語を聞き取って書き込むようになっている。テキストは閉じたまま、モデルエッセイのCDを1回流して、聞き取った単語を空欄に書き入れるように指示する。

2回目を聞く前に、音だけにとらわれずに意味と形の2つの面から考えて空欄に入れる単語を再考するように指示する。具体的には、文章の意味を考えて、空欄に入る単語を推測する方法である。エッセイ全体の意味を考えてから、文ごとにどのような意味かを理解させる。その上で、書き取った単語は意味の面からみて適切なか不適切なのかを判断させる。また、単語そのものを聞きとれなかった学生には、文章の意味を考えさせてから、空欄にどのような単語が入ると意味の通じる文章になるかを想像させた上で、適切な単語を推測させる。つまり音だけではなく意味からも推測させる方法である。

もう1つは形の面から考えることである。それは、これまでに習った文法の知識を活用させることである。具体的には、空欄の前後の品詞とのつながりから考えさせる方法である。たとえば、空欄が文頭にある肯定文であれば、そこには主語になりうる品詞、つまり名詞や代名詞がくることが多い。次に、空欄が文中にある場合は前後の単語の品詞とのつながりを見て推測する。たとえば、空欄の前にある単語がtoであるとしたら、ある程度意味をつかんだ上で、その後には動詞の

原形が来る場合があると想像できる。さらに同じ空欄の後ろには前置詞があるとすると、空欄には動詞が入る確率が高いということが言える。動詞の場合、この動詞の後にはこの前置詞と決まっている単語も多いので、空欄の単語を推測することが容易になる。このようにこれまでの学びをどのように活用するかを具体的に指導する。前述の通り、意味を考えながら推測していれば、音を聞き取れなかったとしても知識を活用して、ある程度までは単語を導き出すこともできる。これまでに学習した文法的な知識を思い起こさせ活用する方法である。

この作業を各自が行った後で再度 CD を聞かせる。その際、1 回目では聞き取れなかった単語を注意して聞くように指示する。その後は辞書の使用を許可して各自が答え合わせをして、それぞれの単語やイディオムの意味をプリントに記入させる。辞書で調べる際に、最初ででくる意味を書き写す学生が多いため、文章の意味が通じるように、最もふさわしい意味を辞書から探し出して書くように指示する。

CD を 2 回聞き、辞書で単語を調べてその意味を記入するところまでは、単独作業で行う。この作業の後に近くの学生と 2～3 人でグループを作り、答え合わせの話し合いをする。この話し合いは 1～2 分程度がよい。なぜなら、集中して聞き取り、調べるという単独作業の後のちょっとした息抜きの意味合いもあるからだ。7 組 8 組には根気が足りず、勉強する習慣が乏しい学生もいるため、90 分の授業を淡々と行っている学生は集中力を維持することは難しく、飽きられてしまう。そのため、授業にメリハリをつけることがこのクラスにおいては不可欠である。ただし、時間を与え過ぎないことも大切である。適切な時間がどれくらいかを判断するのは難しいが、学びたい欲求を高め、持続させ、もっと勉強したいという気持ちを育むように、少し足りない位の時間設定をしている。話し合い後、単独作業に戻りテキストを開いて答え合わせをする。確認のため学生を指名して、書きとった単

語を正しくかつ英語らしく発音させて、日本語の意味も確認する。以上の15分程度の作業が授業の導入部である。

- ② 次にテキストに従い、ユニットのテーマとなる文法事項の説明を行い各種の練習問題を解いていく。毎回の授業では必ず1人1回は指名し、発言させることにしている。指名された学生が口頭で答えるか、問題によっては黒板に書くかであるが、これにより常に自分が授業に参加していることを意識させるようにしている。ただし、自信のない学生や不安がある学生は、大きな声を出せないことや、黒板に書くのを躊躇する傾向がある。大きな声を出せない学生には、「口を大きく開けるように」と指示し、あえて大きな声を出すようには言わない。声の小さい学生はこれまでの学校生活で何度も指摘されていて、自覚していることも多いと想像するからだ。わかってはいてもできないことは多いので、別の角度から指導する。また、発音がうまくできないという理由で大きな声を出せない場合は、全員でその単語を声に出して練習することもある。単語を発音して確認することは、英語の運用能力につながると考えているからである。

学生が黒板に英文を書く場合、自信のなさそうに見える学生に対してはこちらから声をかける。さらには黒板のところへ出ていく学生が声をかけやすい場所に立って、いつでも質問しやすいようにしている。学生が積極的に参加できる授業環境を作り、学生自らが学びたいという気持ちを育て、受け身ではなく積極的に求めていく授業の形態を、様々な方法で試みている。

- ③ テキストの各ユニットの最後で、重要事項の復習や、覚えるべき例文などを全学生に対して質問し、テキストやノートを見ないで答えられるかどうかを確認していく。特に今後使えそうな英文は何度も繰り返して言わせて、書かなくても頭に浮かぶ状態を体験させる。その後は、英文の一部を変えての質問と回答を継続しながら、内容を学生の口

常生活に近づけていく。そうすることにより、自分に関する事柄の表現が容易にできるようになり、会話力の養成につながる。英文が頭に浮かぶようになれば、書くのは大変ではないということも経験的に理解できるようになる。

- ④ 質問も広く受けつける。まじめに勉強していて、わからないことや知りたいことを質問するのは素晴らしいことだと伝える。質問に良い悪いはないと強調する。そして、1つの質問は他の学生にも刺激を与えるので、わからないことがあれば思い切って質問をするようにと常に働きかける。質問に答えた後には、必ずほめ言葉を付け加えるようにしている。知りたい、学びたいという気持ちは何よりも大切であり、その欲求を質問という形に表すことで学ぶ喜びに気づく学生もいる。そのような学生の質問は授業に活気を与える。
- ⑤ テキストに基づいて指導しその内容をより理解させるために、テキスト以外の教材を有効に活用することが重要である。筆者の授業に対するこれまでのアンケート結果には、学生が毎回書いてくるコメントがある。それは、「テキスト以外の〇〇をやったのは良かったしやる気がでた。」「テキストには出ていない〇〇〇をプリントで勉強して興味を持った。」などのテキストには掲載されていない何かを学んだことに対する評価と期待感である。授業に変化をつけることは、英語により興味を持ち、授業にさらに集中するためにも不可欠であり、「Writing I、II」の授業において、フリーライティングを取り入れることはとりまおさず、テキスト以外の教材となり、教育効果が期待できると考える。

5. 「Writing I、II」の授業～フリーライティング～

なぜフリーライティングを授業で取り入れることにしたのか。理由は3つある。第1は本稿の「課題」でもある2つの不安を軽減するために、

テキストを使用する授業とは異なるアプローチをすることで、効果が期待できると考えたからである。英語に対する不安を解消するためのアプローチの1つは、現時点での英語力を自分が認識することである。そのことは、辞書を使用せずに、決められた時間内に、1枚の白い紙にテーマに沿った英文を書くというフリーライティングをすることで、はっきりと自覚できる。「辞書やテキストや、何かを見ないと何も書けない。」「書きたい単語が浮かばない。」「どう書いてよいのかわからない。」などの学生のコメントは、英文を書く能力が十分とは言えないことを認識したものであり、英文を書く経験や辞書使用の頻度の不足も意味している。この自己認識の基に英文を書く機会を増やしていくことが重要だと考える。もう1つの不安、精神的なものについては、書いた単語数に注目しながら、徐々に単語数が増加する過程が不安を軽減し、さらには不安を自信に変えていく要因となると期待する。また単語数を数え、その推移に注目することで、もっとたくさん書きたい、もっと長い英文を書きたいと言う意欲につながり、良い動機づけとなる。

第2は考える訓練を積み重ねることができるからである。テーマについて、自分の考えがなければ書けない。つまり書くことは考えることであるから、書く前の準備として日本語でも英語でも考えることができなければ前進できない。次に日本語の発想で考えていることを英語の考え方に適応させることが必要になる。そこで、どう書き表すのが英語的なのかを考えて、英語の発想に自分の考えを融和させるように工夫する。それは自分の考えを客観的に見て認識する作業であり、自分を知る作業でもある。自分を人間的に成長させる作業の過程でもあると言うことができる。さらには他の学生が書いた英文を読み添削し、コメントを書くことで他者との考えや発想の違いを認識する。その過程から得られる刺激や気づきを通しての学びは大きいと期待する。

第3は学ぶ喜びを知ることである。フリーライティングにおいて学生

は嬉しいと感じることがたびたびあると言う。それはたとえば、フリーライティングを継続することによる単語数の増加がもたらす心象の変化として現れる。単語数は一時的には減少することもあるが、最終回の単語数⁹⁾を比較するとほとんどが増加している。自分が書いた英文について、単語数の増加を数字で確認できるのは、自分の実績に対する満足感となり喜びとなる。また、自分の書いた英文に教員と学生からコメントが与えられる。その際に良いコメントが書いてあった、直接ほめられたという経験は、自分の考えを書き表すことができたという達成感と共に評価されたという自信につながる。さらにはもっと英文を書きたい、自分の思い通りに書いて評価を高めたいという向上心を生成する。学びから得る喜びを知り、その喜びがさらに学ぶエネルギーとなる好循環である。言い換えれば、やる気の原動力となる学びの喜びである。

フリーライティングの準備において授業以外でも自発的に学んだという経験は、フリーライティングを他者から評価されたことによって正当化され、努力が報われるという恩恵をもたらすのではないだろうか。単語数のような明らかな実績とは異なり、評価の対象外と考えていた影の努力が報われたという充実感である。その充実感から生まれる喜びもあるに違いない。この自発的に学ぶということは、今後の人生において、社会人として生き抜くために必要不可欠なことである。自分で調べて自分で勉強する姿勢は社会人としての基本であることを伝え、自発的に学ぶということを継続することの意義も伝え、その学びから得られる喜びは計り知れないことを伝えたい。以上の3つの理由から、フリーライティングを授業に取り入れた。

(1) フリーライティングの指導過程

フリーライティングは1か月に1回程度の割合で行っている。条件と指導方法は以下の通りである。

〈フリーライティングの条件〉

- ・辞書を使用しない。
- ・消しゴムを使用しない。
- ・3分間で書く。

〈フリーライティングの指導方法〉

- ① その場でテーマを与える。
- ② 3分間でテーマについての英文を書く。消しゴムを使用しない理由は、消すことが主となり書くことがおろそかになるのを回避するためである。
- ③ 3分後に各自が書いた単語数を数えて指定の位置に記入する。
- ④ 赤色のペンに持ち替えて、自分の書いた英文を自分で添削する。この時点から辞書の使用を許可する。自己添削終了後、近くの学生と書いたものを交換して、他の学生の書いた英文を添削する。その際には、日本語で必ずコメントを書いて、本人に戻し、口頭でもコメントを加える。
- ⑤ 最後に赤色のペンで今回のフリーライティングについての感想を日本語で記入する。
- ⑥ 後期の授業ではさらに、他の学生のフリーライティングについて良い点と共に、必ず改善が必要な点とコメントを記入する。他者に対するコメントについては書き方に気をつけることも説明する。具体的には、悪い点は、と書くのではなく、「改善が必要な点」や、「ここをこうしたらもっと良くなると思います。」のように書けば、相手の心象を傷つけることもなく、やる気をそぐこともないことを説明する。要するに「自分がどう言われたら気持ちが沈んでしまう」か、反対に「どう言われたらやる気になる」のかを、相手の立場に立って考えて書くことを指導する。

- ⑦ 以上の作業を 10～15 分程度で行い、最後に用紙を提出させて終了する。

〈フリーライティングのフィードバック〉

- ① 学生から提出された英作文を添削し、書いた単語数を学生ごとに記録しておく。翌週の授業でフリーライティングの用紙を学生に返却する前に、良く書けた学生のうち 1 人か 2 人の原稿を、書いた学生の名前は伏せて教員が読んで聞かせる。
- ② 次に、英文の間違いや、単語の使い方、表現の間違ひの中から特に目立った例をいくつか選び、板書して説明をする。その際に、できるだけ高校で習った文法事項に結び付けて解説する。高校で学んだ記憶を思い起こさせ、自然に復習となるように注意を払い指導をする。実際に学生が書いた英文をそのまま板書して、訂正する箇所はどこかを学生に問いかける。もし反応がない場合はこちらから質問をしながら、クラス全体が関わり、正しい英文を完成させるように誘導する。
- ③ 完成した正しい英文を書きとるように指示し、理解度を深めるために黒板を見ながら全員で音読練習を何度か繰り返す。ほぼ暗記できた時点で、学生には英文の音読練習を繰り返させながら、板書した英文の単語を 1 語ずつ消していく。最終的に英文はすべて消されるが、その時点で学生は自然に英文を言えるようになっている。
- ④ 最後に、学生に用紙を返却してフィードバックが終わる。

以下は 2015 年度の前期と後期のフリーライティング実施日とテーマである。

〈フリーライティングの実施日とテーマ〉

2015年度前期

- 4月13日 Self-introduction
- 5月25日 What did you do on the weekend?
- 6月29日 June

2015年度後期

- 9月17日 What was the most memorable thing in summer?
- 10月22日 Musashi Festival
- 11月26日 My favorite things *この回以降6分間に変更。
- 12月10日 Which is more important for you, money or dream?
- 1月7日 New Year's Resolution

6. 学生の反応

6月頃から学生の様子に変化が見え始める。授業前にテキストやノートを開き真剣に見ている学生が増える。授業中に挙手して質問する学生がではじめる。机間巡回中に質問をする学生もいる。授業後に質問をする学生も少数ではあるがでてくる。授業中に辞書を引く学生が常時数名いる。電子辞書の音声機能は普段は禁止しているが、初めての単語でかつ発音が難しい場合だけは、例外的に音声解禁とする。1分程度の音声解禁の時間ではあるが、学生は先を争って電子辞書で単語を調べて音声を聞く。中には何度も音出しをする学生もいる。教室のあちこちでその単語の発音が聞こえるこの作業によって、単語の発音を習得するだけでなく自分が授業に積極的に参加している感覚を得られるのではないかと考えている。さらにその時電子辞書から流れた音声や、クラスの状態と共に単語を連想しやすい効果もあると考える。前期が終了する頃には

指示がなくても不明な単語があると、面倒くさがらずに辞書で単語を調べようになる。

後期に入ると学生は大学生活に慣れ、教室には勉強する雰囲気が満ちる。そして、学生の言動に変化が現れる。学生の書きたい学びたい欲求が具体的に表れたのが、フリーライティングに関しての要望である。「書く時間が3分では足りないので、長くしてほしい。」「準備をしたいからテーマを1週間前に知らせてほしい。」という声であった。学生と話し合い、まずはテーマだけを1週間前に予告することにした。1週間の準備期間は「Writingにおける辞書指導のあり方」でも言及した通り、準備期間で辞書を引く機会が増えるという効果を期待できる。かつ、各自でテーマについて考え、英文を書くという自主学習の体験は貴重である。時間の延長は学生の様子と書く内容、量を見た上で後日検討することにした。テーマ予告後の経過と結果を次にまとめる。

後期2回目のフリーライティングのテーマは“Musashi Festival”である。教職員全員参加で臨んだ大学祭について、学生には書くべき材料が豊富にある。事前にこのテーマを発表して、1週間後にフリーライティングを行った。当日はクラスの3分の2程度の学生が準備をしてきた。ノートにびっしり書いてきた学生、紙切れに箇条書きのメモを持ってきた学生、ルーズリーフ1枚に清書してきた学生など様々であった。中には書いてこなかったが、考えてきたという学生もいた。心の準備はできているから何もなくても書けますという学生もいた。忘れていたという学生も数名いた。テーマはあらかじめ知らせていた大学祭である。書きたいことが次々に浮かび、ある程度の量の英文を書けるのではないかと予想した。

ところが結果は予想外であった。学生のコメントには、「せっかく準備してきたのに紙に書いた通りには書けなかった。」「準備してきた英文とはなぜか違った書き方になり、そのまま書いたら、全く違う内容になっ

てしまった。」「準備した英文を思い出そうとしてあせっているうちに時間が終わり、単語数はのびなかった。」というような否定的な内容のコメントが多かった。なぜこうなったのかを探るため、学生のコメントを再読して推測できることがあった。それは、準備した英文を暗記してフリーライティングに臨んだのではないかということだ。つまり、フリーライティングの準備イコール準備した英文を暗記して書く、と学生は無意識のうちに思っていたのではないかということだ。確かめてみると、うなづく学生がほとんどだった。確かに自分が書いた英文を暗記するのは悪いことではない。しかし、暗記した英文を思い出して書くだけでは、単なる記憶と再生の作業になってしまう。英語を理解して身につけるといふ本来の学びの姿に近づけるために、教えなければならない事は数限りなく存在する。しかしそのすべてに対応するのは困難と言わざるを得ない。詰め込み過ぎれば、学生を混乱させるだけになることから、優先順位を考えて書く前の準備と文章の構成に焦点を絞って教えることにした。書きたいことを考え、その中の重要事項を明確にして文章を構成すれば、暗記しなくても書けるようになるはずだ。この考え方を学生に理解させて、暗記して書くというとらわれから解放することを次の目標とした。

そこで、翌週のフィードバックでは英文を書くための文章構成を教えた。1年次の「基礎ゼミナール」や「文章作法」の授業で、日本語の書き方を習得しているはずである。復習の意味合いも込めて、今回は序論、本論、結論からなる最も基本的な3部構成を取り上げて解説した。それぞれのパートで使うことができる単語や英語の表現も教えた。また、自分の考えを膨らますために紙に書いて行うブレインストーミングや、自分の考えを整理するためにマッピングについても説明した。このように、次のフリーライティングに役立つだけでなく、今後も活用できる重要な事項として3部構成を指導した。英語を書くときだけでなく、日本

語を書く際にも有効であり、社会人となってから報告書や企画書を書く上でも活用できることを伝え、必要性を強調した。

フリーライティングの指導にあたって、時間を延長すべきか否かに迷いはあったが、学生の「もっと書きたい」という意欲を優先して、時間を3分間から6分間に延長し、前回同様に1週間前にテーマを伝えることにした。次のテーマは“My favorite things”である。さらに、多くの要望に応じて始めていた「前置詞の復習」と関連づけるため、復習した前置詞を3つ以上使用することも新たな条件として加えた。当日、学生はこれまで同様にそれぞれが準備してきたノートや紙を見ながらフリーライティングに備えていた。前回よりも準備してきた学生が多かった。今回のテーマも書き易いはずだが、テーマについての考え方や文章の構成など、多くのことを授業で教えたため、それらをどこまで理解して英文を書くことができるかが最も注目すべき点である。さらに前置詞を使用するという新たな条件も加えた中で、学生がどのように準備をして、どのような英文をどれくらい書くのかに期待した。

結果は予想以上のできであった。学生がそれぞれに準備をしてきたことが、よく英文に表現されていた。準備してきた英文の暗記にとらわれた前回とは違い、ブレインストーミングや文章の構成を学んだことで、書くことが頭の中で整理されていることが伺える英文に変化していた。これまで繰り返し練習して覚えたいくつかの例文を基に、学生が自信を持って自分の意思で英文を書いていることもわかった。全員がよどみなく書き続けた6分間であった。その結果、間違いも少なくなった。さらに、これまでとの大きな相違は、書くことが整理されていることと、充実した内容をわかり易く表現したことである⁶⁾。たとえば資料1の「後期第3回」を見てみると、“I like horror movies.”のように複数形を正しく使った英文を書いている。しかし、「前期第1回」では“I like cat.”のように名詞はそのまま書かれており、複数にも単数にもなっていない

かった。さらに、「後期第3回」の文章構成を見てみると、“My favorite thing are to read comic books and listen to music and watch movies at a movie theater. First,... Second,...”と続けている。小さな誤りはあるものの、書くことを整理して英文を書いていることがわかる。また内容を理解しやすい平易な英文であった。多くの学生が「書きたいことを英文で書くことができた。」と言った。

前回のテーマ“My favorite things”について、ほとんどの学生がよく書いていたので今回は難易度の高いテーマにした。“Which is more important for you, money or dream?”である。これまでとは違い、まずじっくり考えてから、自分でどちらかを選択しなければならない。この選択は容易ではない。さらにその理由もはっきりと書かなければならない。時間も労力もかかる難儀なテーマを与えた。しかし学生はやる気に満ちて、モチベーションも高まっているので、この難解なテーマでも挑戦できると考えた。

結果は、お金と夢という究極の選択に及んで、「考える時間が長かった。」という反応が多かった。考え抜いて選択したが、「理由を説明するのが大変だった。」という学生も多かった。

最初に自分が選択した事を書き、続けてその理由を書くという構成で英文を書いた学生がほとんどであった。中にはお金を選んだ場合と夢を選んだ場合の両方の理由を書いて、最後にだから自分は決められないと結論付けた学生もいた。どちらにしても選択の結果と理由が書かれていて、これまで学んだ文章の要素と構成が反映されていた。理由については英文そのものに多少の不備や物足りなさはあるものの、選択した理由を理解させるに足る内容となっており、複雑な心象を書く際に起こり易い意味不明な英文はなかった。数人の学生は「自分の考えを十分に英語で書けなかった。」と言った。自分の考えを書ききれない欲求不満があったと推察するが、そのもどかしさや歯がゆさが次のステップへ向上する

エネルギーとなり動機となることに期待したい。全体的に、回を重ねたフリーライティングの経験が役立っていると言える内容であり、よく考えて書いたことを評価したい。

次に普段の授業において見受けられた学生の行動の変化を、筆者の通常の指導や気づきと共に前期、後期に分けて列挙する。

前期

- ① 授業の予習と授業前の準備がほぼできるようになる。具体的には、テキスト、ノートを開いておく。電子辞書は開けておき、すぐに調べられる状態にしておく。紙の辞書はケースから出しておく。すぐにメモできるように筆記用具もそろえておく。このすべてを整えて授業を待つ学生が増えた。授業5分前に入室して、ほとんどの学生がこの状態になっている。
- ② 授業のベルが鳴り終わるとすぐに、英語であいさつをするが、その際に、学生がきちんとしていなければ毎回次の事を注意した。良い姿勢、手は膝の上、足はそろえて組まない、顔は誰に見られても困らないように、自然で感じの良い表情を心がけるである。前期の後半には、教員が教室全体を見回すだけで、自分から居住まいを直す学生も増えた。
- ③ 授業中の学生の態度が変わる。進んで勉強する雰囲気があり、ある種の緊張感がある。当然のことながら、私語や居眠りはない。しかし、90分集中する気力と体力が備わっていない学生が存在することも事実である。これは中学高校時代の過ごしかたにも関係するかもしれない。勉強する習慣、教科書や本を読む習慣、辞書を引く習慣などと関連してくる。そのような習慣のない学生がいることが、7組8組の授業を担当しているとよくわかる。しかし、行動しやすいように指示を出せば、まじめに一生懸命に取り組む素直さがある。この素直さは美

徳であり、潜在能力を発揮するための大事な要因として期待できる資質であると筆者は評価している。

- ④ 2015年度前期の「授業アンケート」から学生のコメントの一部を紹介する。

学生A：Writingの授業のおかげで苦手だった文法が以前よりも深く理解することができました。

学生B：あいまいになっていた文法や表現が確認でき、新しい単語や適切な英語の書き方が理解できました。

学生C：エッセイを書く力が身についてよかったです。

学生D：中学校や高校で学んだことを思い出した。フリーライティングで自分の思っていることを少しは文章にできるようになった。

学生E：自分で英作文を考えてつくることの楽しさを学んだ。最近、少しずつだけ自分の英語の力が伸びてきているのがわかる。もっと頑張ろうとも思える。

学生F：わからない文法を丁寧に教えてくれたり、文章を書く量も増やせる練習ができた。

学生G：教科書以外にも前置詞や国について文化などを学ぶことができました。

学生H：フリーライティングはとても力になったし前回より書く単語数が増えると嬉しくなった。前置詞も1つ1つ理解を深めることができた。

後期

- ① 積極的な質問や意思表示が自然にできるようになった。
- ② 予習の定着と授業に備えることが習慣化できた。
- ③ フリーライティングの内容に関して質的な向上を客観的に証明するのは簡単ではない。しかし、書かれた英文を読むとその違いは明らか

である。それは文章の構成ができており、書かれた英文の質が向上し、内容が英語的な考えに基づいて書かれるようになったからである。4月の最初に書いた自己紹介の文章と比べるとその内容と語彙の差を認めることができる⁷⁾。資料1の「前期第1回」の自己紹介では、“I love game.”と書いている。“game”は単数形のままであり、わずか3単語の文であった。しかし「後期第3回」のテーマ“My favorite things”では、“I like the variety of comic books. I prefer boy comic books to girl comic books.”のように書き、正確な英文を書くようになっていく。

- ④ 2015年度後期の「授業アンケート」から学生のコメントの一部を紹介する。

学生I：フリーライティングのおかげで自分で文章を作る力がついた。英文をつくるということは同時に日本語の力も必要になるので、自分の日本語力も試される良い機会になる。

学生J：文の品詞が、前期の、入学したばかりの頃は曖昧だったのが今では、だいたい理解できるようになり、そのおかげで、文の並べ替えの時は、以前よりも楽にできるようになった。

学生K：前置詞を詳しく学んだことによって、Writingだけではなく他の科目の授業の中でも役立てることができてとてもよかったです。

学生L：私はフリーライティングで英語を書く楽しさを知った。最初は全然書けなくて、3分間苦痛でした。でも、授業で学んだことや今ある知識を書けるようになってきて、後期に入ると話題(テーマ)は難しかったけど、楽しく書けた。

学生M：頑張れる。理由はわかりません。1番記憶にあるのが、made from と made of です。

学生N：フリーライティングで前期は3分、後期は6分でやってみて

最後のほうはお題が難しく書くのも大変だったけど、入学したばかりの時よりたくさん書けるようになったし、やればやるほどもっと書きたい!!って思えるようになりました。

学生O：この授業では Free Writing があり、自分の気持ちを英語で表現する方法を学びました。さらに、他の人と交換することで他の人の意見をしることができ、感受性が広がったと思います。また Free Writing のあとにはフィードバックをしてくださるのでとても力になっています。英語で書くことがすきになりました。

7. まとめ

前期と後期のフリーライティングにおいて、前期に学生が3分間に書いた平均単語数は、第1回34語、第2回32語、第3回25語であった。第3回の平均単語数が25語と減少しているのは、第3回が“June”という抽象的なテーマであったからではないかと推察する。第1回の最少単語数は13、最多単語数が53であった。前期最後の回の最少単語数は13、最多単語数は60であり、差は広がった。この数字からも英語力の二極化を読み取ることができる。

後期のフリーライティングにおいて、3分間に1人の学生が書いた平均単語数は第1回が38語、第2回は37語であった。これは前期（第1回34語、第2回32語、第3回25語）と比較すると、数単語ながら増加しており評価できる。書く時間を6分間に変更後の平均単語数は、後期第3回は69語、第4回は71語、第5回は71語であり、微増したと言える。

後期3分間の最少単語数は24、最多単語数は55であり、前期と比較すると差は狭まった。後期は前期（最少13語、最多53語）と比較すると、最少単語数が11単語増加したことから、底上げがなされたと評価する。最多単語数も2単語の微増ながら効果が現れたとすることができる。6

分間の最少単語数は24、最多単語数は96であり、差は開いた。年間を通して特筆すべきは、前期の最少単語数13の学生が後期最後の回に6分間で93語を書き、80語の著しい増加を示したことである。

英語に対する不安は、フリーライティングを1年間に8回行ったことで、ある程度軽減できたと言える。単語数の平均が微増したことで英作文能力も向上したと言える。また学生のコメントから、英文を書くことに対する不安が楽しさや意欲に変化したことがわかる。フリーライティングの積み重ねで、「完璧にできた」には至らなくとも少なくとも「自分の力でやった」という体験を通して、自信を持つようになったのではないかと考える。

辞書使用に関するコメントは「授業アンケート」にはなかったが、辞書の必要性を感じていなかった多くの学生が、前期の後半には授業で辞書をテキストと同様に扱うようになった。辞書を忘れて困ったという学生の言動から、辞書使用の習慣化ができたのではないかと言うことができる。

最後に学生は他者の英作文を読むことで、自分とは異なる考え方を知り、視野を広めたのではないかと推測する。「授業アンケート」のコメントにも「他の人の意見を知ることができ感受性が広がった。」と学生は書いていた。他者との関わりにおいて英語を学ぶことが、人間としての成長にも何らかの良い影響を与えているのではないかと考える。

8. おわりに

本学では習熟度別クラス編成を行っているが、7組8組には英語の学力と学習体験の二極化が存在すると言える。これが一時的なものでその年度だけの傾向なのか、恒常的なものかは今後もよく観察して見極めなければならない。しかし、このような二極化が存在するのは確かであるから、その状況に適応した指導方法と、動機づけについては今後の課題

である。自分の辞書を持たない学生も、暗記が勉強だと勘違いしている学生も、英語の予習はしたことがないという学生も実際に存在する中で、英語の基礎学力はいうまでもなく、英語で考える力をつけ、自分の力で長い英文を書いたという成功体験を積み重ねられるように、学生一人一人に対して一層きめ細やかに指導していきたい。また効果的に指導できるよう、指導法の研鑽にも真摯に取り組みたい。

注

- 1) 井之川睦美「辞書使用の可・不可がどのように時間制限のある英作文に影響を与えるか」『北東アジア言語教育学会 Working Papers 2009』2009年、p.13。
- 2) 井之川睦美「辞書使用の可・不可がどのように時間制限のある英作文に影響を与えるか」『北東アジア言語教育学会 Working Papers 2009』2009年、p.13。
- 3) 國吉初美「課題によるパラグラフィティングから口頭発表へ：英作文から英語の発話までの指導の授業手順」『神奈川大学言語研究 26』2003年、p.193。
- 4) 國吉初美「課題によるパラグラフィティングから口頭発表へ：英作文から英語の発話までの指導の授業手順」『神奈川大学言語研究 26』2003年、p.198。
- 5) 初回は3分間で計測し最終回は6分間に変更したことをふまえ、初回のワード数を2倍して比較した。
- 6) 資料1 参照
- 7) 資料1 参照

資料 1

「Writing I、II」を履修した学生のフリーライティング原稿を原文のまま、日本語のコメントと共に掲載する。名前を伏せて下線で表記し、() 内の数字は単語数を表す。

前期 第 1 回 4 月 13 日 Self-introduction (36)

My name is _____. I'm from Ebetsu. I like English study but I'm not well. I love game. But English game is very difficult. So I hope English skil up. I like cat. But I have cat

コメント：今の自分にはまだまだ英語力が足りなくて不安なことが多いですが、主に仮定法をしっかりと学んでいきたいです。私はきっとクラスの中で最も英語ができないと思いますが、努力していきたいです。

前期 第 2 回 5 月 25 日 What did you do on the weekend? (28)

I went to art museum in Sapporo. I look at a lot of Ukiyoe. The Ukiyoe were painting by Kuniyoshi Utagawa. I was very exciting. I want to

コメント：頭の中で何を書きたいかはきまっているのに、それを英文にしようとするとうまくまとめられませんでした。まだまだ書きたかったです。

前期 第 3 回 6 月 29 日 June (22)

I think June has very humid. I dislike humidity. But, I like summer. The following month is July. I can't wait. June

コメント：今回フリーライティングがあることを忘れてしまっていたので、次回は準備をしようと思いました。これからさらに自分の文法力を高めていきたいです。

後期 第1回 9月17日 What was the most memorable thing in summer? (46)

There are three main my memorable things during my summer vacation. First, I went to a movie theater in Sapporo with my friends of Hokkaido Musashi Women's Junior College. I watched "Jurassic World". I was very impressed. Second, I went to an autograph session of animal

コメント：本当はもっと書きたいことがあったのですが、書くスピードが遅くて全部書くことができませんでした。自分の伝えたいことを時間内にしっかり書けるように努力していきたいです。

後期 第2回 10月22日 Musashi Festival (44)

I enjoyed myself at College Festival. It was held for two days but I couldn't participate to second day because I had to take the Eiken. I fried the French fries in my seminer. It was very tired and very fun. After, I was

コメント：家で用意してきた英文を書いているうちに、用意してきた文章以上のことを更に書きたくなってきたので、フリーライティングがとても楽しいです。次回からは3部構成をいしきしていきたいと思いました。

後期 第3回 11月26日 My favorite things (71)

My favorite thing are to read comic books and listen to music and watch movies at a movie theater. First, I like the variety of comic books. I prefer boy comic books to girl comic books. Second, I often listen to music in video games. I often buy a soundtrack of video games. Finally, I like horror movies. My most favorite horror movie is "REC". It is very impressive. In addition, I

コメント：今回のフリーライティングは6分間だったので、家でしっかりと用意してきました。ですが、書いている途中で the variety of types of ~ の表現が分からなくなってしまったので、とても悔しかったです。

後期 第4回 12月10日 Which is more important for you, money or dream? (73)

Dream is more important for me. I have three reasons. First, if I don't have a dream, I can't enjoy my life. Second, if I have a dream, I make more effort to grant a dream. Finally, if I have a dream, I can get big pleasure when I earn money. These are the reasons why dream is more important for me. I want to have a lot of dream in the future.

コメント：家で用意してきた文章を時間内に書ききれるようにすることを目標にして書きました。いつも途中で時間切れになってしまっていたので、今回はすべてを書くことができてよかったです。

後期 第5回 1月7日 New Year's Resolution (55)

I have two New Year's Resolutions. One is my dreams come true. My dream is to become a bank teller. I am eager to job hunting because I want to be a polite bank teller. The other is to improve my English skill. I want to improve my English. There are my New Year's Resolutions.

コメント：用意してきた文の中で一つの文を書くのを忘れてしまい、用意してきた文よりも短くなったのがとても悔しかったです。最後のフリーライティングでしたが、楽しんで書くことが出来ました。

*「フリーライティング」の添削は学生の英文に下線を引き、「辞書チェック」や「冠詞復習」のように短い指示を与え、明らかな単語の誤りには正しい単語を書き添えるなどして個別の対応をしている。ここでは添削以前の英文を原文のまま掲載した。

参考文献

- 井之川睦美 (2009) 「辞書使用の可・不可がどのように時間制限のある英作文に影響を与えるか」『北東アジア言語教育学会 Working Papers 2009』
國吉初美 (2003) 「課題によるパラグラフライティングから口頭発表へ：英

作文から英語の発話までの指導の授業手順』『神奈川大学言語研究 26号』

- Krashen, Stephen and Terrell, Tracy D. (1983) *The Natural approach: Language Acquisition in the Classroom*. Pergamon Press.
- Krashen, Stephen. (2003) *Explorations in Language Acquisition and Use*. Heinemann.
- Okuda, Takaichi and Allan, Anthony. (2012) *Writing Points! Basic Grammar for Better Writing*. Kinseido.
- Ruhl, Dawn Michele. (2011). Helping Students Find Their Writing Voices, *Research and Development Center for Higher Research 2*, 27-34.
- Swain, Merrill. (1985). *Communicative Competence: Some Roles of Comprehensible Input and Comprehensible Output in its Development*. Newbury House.
- Swain, Merrill. and Lapkin, Sharon. (1995). Problems in Output and Cognitive Processes They Generate: A Step towards Second Language Learning. *Applied Linguistics 16*, 371-391.